

第4章

特徴的な学校の取組

- ・鳥取市立日進小学校
- ・鳥取市立江山学園
- ・米子市立就将小学校
- ・境港市立第一中学校

児童生徒の学力の伸びが大きい学校や、非認知能力・学習方略の数値が高い学校を訪問し、学校で意識して取り組んでいることを聞き取りました。

児童生徒の学力の伸びや、学力の下支えとなる非認知能力や学習方略を高めるために効果があると思われる取組を紹介します。



生き生きと学び、主体的に取り組む児童の育成 ～鳥取市立日進小学校～

1 とっとり学力・学習状況調査の状況

【学力レベル】5年生及び6年生のどちらも、国語、算数ともに県平均を上回っている。5年生の算数では、「学力を伸ばした児童の割合」「学力の伸び」で県平均を上回っており、下位層において伸びた児童が多い。6年生は、国語、算数ともに「学力を伸ばした児童の割合」「学力の伸び」で県平均を上回っている。

【主体的・対話的で深い学びの実施】5年生、6年生ともに、伸ばしている。

【学習方略】5年生は、すべての項目において、6年生は、「柔軟的方略」「認知的方略」を伸ばしている。

【非認知能力】特に5年生は、「自己効力感」「向社会性」が県平均を上回り、伸ばしている。

掲載資料の
実物データは、
右の二次元
コードを参照



2 効果があると考えられる取組

令和5年度から2年間、県事業「子どもが伸びる授業づくりプロジェクト（小学校国語科）」を活用して校内研究に取り組んできた。児童が生き生きと主体的・協働的に学ぶ授業づくりを目指して取組を進めている。

(1) 「子どもが伸びる授業づくりプロジェクト（小学校国語科）」の取組より

①指導事項や付けたい力を明確にし、単元構成を意識した授業づくり

国語科の授業づくりにおいて、単元における指導事項や付けたい力を明確にし、児童と一緒にゴールを設定するなど、単元構成を意識した取組の研究を進めてきた。説明文や物語文における指導事項について、該当学年だけでなく全学年の系統性を確認し、全教職員で共通理解・共通実践して取り組んだ。ラーニング・マウンテン（※）を活用することで、児童は今日の学習で何をするのか、どんな力を身に付けるのかなど、見通しや意欲をもち、主体的に学習に向かうことができるようになってきている。また、単元構成の中に、単元で身に付けた力を発揮する場を設定することで、児童が「わかった」「できた」と実感できる授業づくりにも努めてきた。教科書教材と併せて複数の資料や本を扱うことで、児童が初読の文章の読解にも抵抗なく取り組めるようになっている。この取組を継続してきたことにより、最初は受身だった児童が、単元のゴールについてどうしたいかを自分たちで考えるようになるなど、主体的な姿が見られるようになってきた。



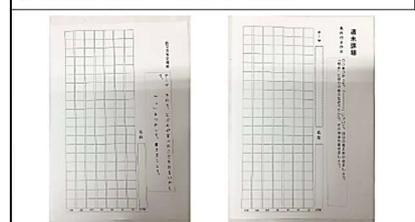
児童とともに作るラーニング・マウンテン

※ラーニング・マウンテン…「Let's Climb the Mountains of Learning」（学びの山に登ろう）の略称で、各教科等の単元や題材のまとまりを“山登り”に例えたもの。（大妻女子大学 樺山敏郎教授提唱）

②読み書きの体幹を強化

児童の読み書きの抵抗感をなくすために、授業の中では、各学年で付けたい力や児童の実態に合わせて「3Z（条件・字数・時間）」を設定し、記述する活動を取り入れている。また、週末の家庭学習として、条件付き作文、読解プリント、新聞を活用した作文にも取り組んでいる。これらの取組を継続してきたことによ

家庭学習や学習中に100マス作文、160字作文、200マス作文に挑戦



条件付き作文ワークシート

子どもの実態に寄り添う授業改善 学力向上と非認知能力を育む組織的・継続的实践 ～鳥取市立江山学園～

1 とっとり学力・学習状況調査の状況

- 【学力レベル】6年生は、国語及び算数について、9年生は、国語について、県平均を上回っている。特に、9年生については、国語の「学力を伸ばした生徒の割合」で県平均を大きく上回っている。
- 【主体的・対話的で深い学びの実施】6年生、9年生ともに、大きく伸ばしている。
- 【学習方略】9年生は、すべての項目において県平均を上回っており、6年生は、「柔軟的方略」「プランニング方略」「作業方略」「努力調整方略」が県平均を上回っている。
- 【非認知能力】6年生では「自己効力感」が、9年生では「勤勉性」が県平均を上回っている。

2 効果があると考えられる取組

「子どもを迷わせない徹底した視覚支援と個別支援（6年）」及び「知的好奇心を刺激し続ける単元設計と主体性を引き出す構造化（9年）」の両輪のような取組、そして、それらを支える「探究的な学びの土壌」（特設教科「江山かがやき科」）の中で、子どもの実態に合わせ、教師が柔軟に「子ども目線」で授業を設計し続ける姿勢や工夫により、上で示した項目を伸ばしている。

「ワークシート」「手引き」等、実物のデータは、こちらの二次元コードを参照



（1）可視化とスモールステップによる「安心感」の確保と「できた！」の積み重ね（第6学年）

①「何をするか」がひと目でわかる授業づくり

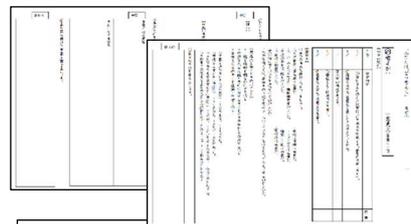
年度当初に、学習への集中が難しい実態があったため、徹底して「情報のシングルタスク化」を図った。教科書やプリント、ワークシートを即座に大型モニター等へ提示し、「今、何に、どのように取り組むか」という指標を視覚的に示した。仮に教師の指示が聞きとれなかった場合でも、このように視覚情報によって自走できる環境を整えることが、児童の意識集中と学力向上に繋がっていると考えられる。



大型モニター等を利用した視覚支援

②スモールステップ・ワークシート

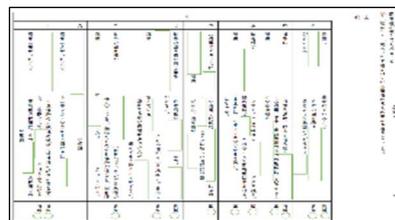
「書くこと」への抵抗感の軽減を目指し、指導事項を明確にした上で児童生徒のつまづきを予想し、書く内容を限定した。記述する枠の大きさや問いの難易度について検証した独自のワークシートを作成し、「ここにこれを書けばOK」というポイントを明確にして指導を継続した。



学習の流れがわかるワークシート

③「安心感」を基盤とした対話の導入

授業の中で、個人で思考することが難しかった実態を踏まえ早期に、友達に教え・教えられるグループ学習（大きなワークシートの共有化等）を導入した。音読では班単位の「丸読み」等の手法で誰もが安心して学習に参加できる環境を整えた。



スモールステップ・ワークシート

④習熟度別学習の柔軟な運用と「学びの足跡」の可視化

義務教育学校の強みである中学校数学科教諭との連携により、算数科において少人数指導を実施した。基礎を固めたいグループには、プリント1枚ごとにシールを貼る等の「学びの足跡」で自分たちの学びを可視化し、「今日は〇〇ができた！頑張った。」という満足感を持たせたことが、「自己効力感」の向上につながった。また、課題をクリアする度に、教室に掲示した名札を動かしていく工夫を行った。児童が自分の現在位置を確認でき、「次はあそこまで行きたい」という学びの意欲につながった。

(2) 国語科における単元学習の構造化 (第9学年)【国語科の実践】

①「単元学習」による見通しと目的意識の共有

生徒自らが1年後の自分をイメージするオリエンテーションを実施し、学習の「着地点」を教師と生徒とで共有した。また、単元の導入時には「この単元でどのような力を付けるか」を明確に示し、共有した。

②「マスターシート」による知識の定着

文法や古典等の知識分野の定着に課題があったため、遊び心を取り入れた継続的な仕組みを導入し、主体的な学びを促した。具体的には、「マスターシート」を活用し、クリアするごとに「ゴールド」「プラチナ」とランクアップする仕組みで、向上心を持って地道な反復練習に取り組んだ。この「地道に繰り返し取り組むことで課題をクリアしていく感覚」が、「勤勉性」の伸びに反映していると考えられる。

③読みと書きとを繋ぐ「言語活動」

教材文を単なる読解で終わらせず、その内容を基にした表現活動を必ずセットにして指導した。例えば、小説「握手」の学習では、教材文の読解後に主人公になりきって「ルロイ修道士への弔辞」を執筆した。その後、互いの作品を読み合うことで、仲間の新たな一面を発見し、対話をより深化させる相互評価のサイクルを構築した。このような生徒の人間関係の深まりが、授業での「表現活動」や「質の高い対話」を支え、知的好奇心を高めていると考えられる。

(3) 学校全体で取り組む特設教科「江山かがやき科」

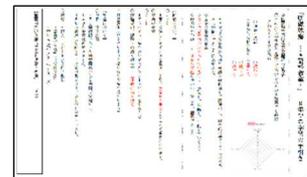
義務教育学校の強みを活かした特設教科「江山かがやき科 (SDGs 探究)」の7～9年生における学びが、各教科の学習方略等の土台となっている。

①試行錯誤の推奨

教師が正解を教えすぎず、児童生徒が自分でプランを立て、修正する過程を重視している。このことが、わからない所を重点的に学ぶ工夫をする「柔軟的方略」、学習の見通しを立てる力である「プランニング方略」の伸びにつながっていると考えられる。また、このような試行錯誤を繰り返す中で、難しい問題にも諦めずに取り組むことを継続したことが、「努力調整方略」の伸びにつながっていると考えられる。

②教科等横断的な学び

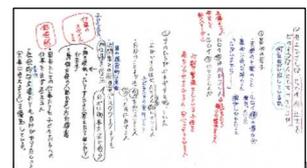
特設教科「江山かがやき科」で培った「問いを立てる力」や「情報収集の術」が、国語科や算数科・数学科における深い学びにつながり、全学年の伸びを生む原動力となっていると考えられる。



国語科学習の手引き
(ガイダンス)



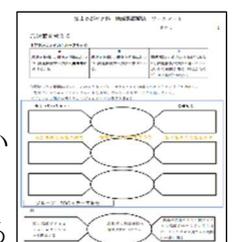
マスターシート



「握手」の授業ノート



「握手」最後のシーンから

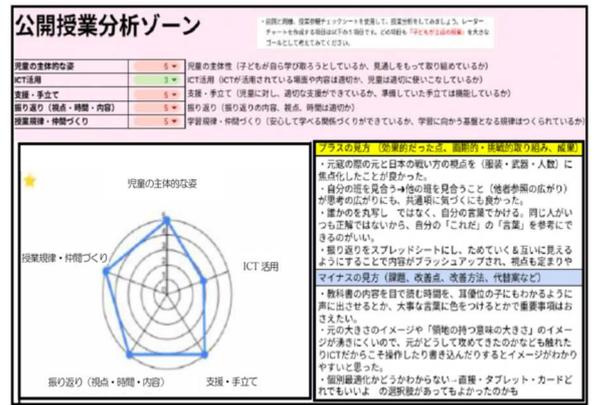


「江山かがやき科」
ワークシート

チェックシートに基づき、5つの視点に沿って5段階評価し、レーダーチャートで視覚化している。それを基にプラス・マイナス双方の視点で協議した。年間を通じて取り組む中で、「子どもが主語」の授業とはどのようなものか、めざす方向性の共通理解のもと、協議しながら授業づくりを進めることができた。

④児童の主体的な学びの時間（朝の帯時間）

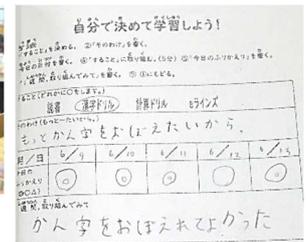
朝の帯時間（10分間）を児童の主体的な学びの時間とし、全校で取り組んでいる。内容は、「漢字」「計算」「読書」「eライブラリー」「タイピング練習（らっこたん）」等の中から、児童が自分で決めている。自分が得意なことに取り組む児童もいれば、苦手なことに繰り返し取り組む児童もいる。「もうすぐテストがあるから、今週は漢字練習をがんばろう。」等、児童が自分で目標を持って取り組む様子が見られる。週末（金曜日）には取組内容を振り返り、次週の取組を決めることで、週が明けたらスムーズに活動に入れるようにしている。このような取組は、学習方略（柔軟的方略・プランニング方略）の伸びにもつながっていると考えられる。



授業研究会で使用した分析シート



朝の帯時間の様子



⑤学級経営の充実

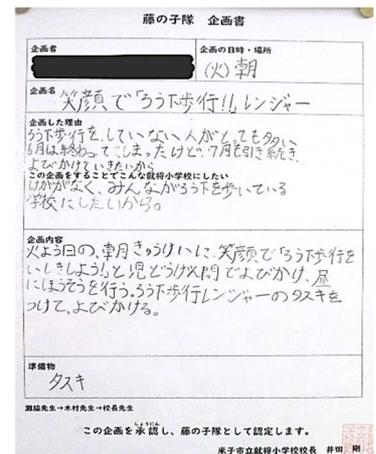
普段の生活の中から、友達ややさしいところや良いところへ目を向けて意識できるように「いいところ見つけ」に力を入れて取り組んだ。運動会、学習発表会、宿泊体験などの行事の際には、ワークシートの中に友達の良いところや自分の良いところを見つけて書く欄を設けたり、席替えをする際に隣の席の人の良いところを言ってから移動するようにしたりと、各クラスで工夫しながら取り組んだ。友達から認められているという経験で、自分に自信を持ったり、やる気につながったりする姿が見られた。

(2) 児童が主体となって活動する場の設定

みんなの学校生活をよりよいものにするために、上学年の希望者が「藤の子隊」として活動している。活動内容を自分たちで考えて企画書を作成し、学校長へ提出して承認されると活動に入る。これまでに、「児童玄関ピカピカ大作戦!!」を企画して下校後の児童玄関の清掃をしたり、「廊下歩行レンジャー」として校内へ廊下歩行を呼びかけたりと、児童が各自でアイデアを出して形にしていく中で、感謝の言葉をもったり、達成感を味わったりしている。このような取組は、児童の自己効力感の高まりや、主体的・対話的で深い学びの実施につながっていると考えられる。



藤の子隊として、「児童玄関ピカピカ大作戦!!」に取り組む様子



企画書

確かな学力と豊かな心を育み、

これからの社会を生き抜く生徒の育成

「生徒が主体的に学ぶ授業」と「勇気づけ教育」の組織的展開を通して

～境港市立第一中学校～

1 とっとり学力・学習状況調査の状況

【学力レベル】数学では2，3年生ともに学力レベルが伸びており、「学力を伸ばした生徒の割合」も県平均より高い。国語では、3年生の学力レベルが伸びており、「学力を伸ばした生徒の割合」も県平均よりも高い。

【学習方略】2年生は、すべての項目において、県平均を上回っている。3年生は認知的方略、プランニング方略の項目において、県平均を上回っている。

【非認知能力】2年生は自己効力感、向社会性ともに県平均を上回っている。

2 効果があると考えられる取組

第一中学校ではこの3年間、人権教育を土台とした「確かな学力」と「豊かな心」の育成に向け、生徒を学習の主体者とし、学ぶ意欲を引き出すため、生徒が自ら学びを調整できる授業や「学び合い・教え合い」によるわかる喜びを感じられる授業を日々実践し、他者と関わるときには「自分と相手のために聴く」ことを徹底してきた。

(1) 生徒が主体的に学ぶ授業を目指して

①学びのMAPの共有

生徒が単元全体の見通しをもてるように学びのMAPを作成し、単元の初めに「この単元でつけたい力」や「学びの価値」を生徒と共有した。特に数学科では、学んだ内容を振り返り、自己の理解を深めるための復習、次回の学習内容を確認し、自分の問いを持つための予習など、自身の学びの調整に役立てている。生徒が学びの連続性を意識するようになったことで、わからないところや要点をつかんだ状態で授業に向かえるようになった。この取組が、学習方略の努力調整方略、プランニング方略の値の伸びにつながっていると考えられる。

②アウトプットの機会を充実させた授業づくり

どの教科においても、生徒同士の対話の時間を大切にするために、1時間の授業の中に必ず自分の考えを持つための個人思考の時間と、考えを伝え合うアウトプットの時間を確保することで、全員が「わかった」「できた」という実感を持てるようにしている。数学科では、アウトプットの視点（数学用語や式を使うこと、理由も伝えること）を、単元を通して繰り返し伝えている。さらに、間違えた問題を誰かに説明することを想定した解説作り、まとめを生徒の言葉で書くなど、「自分の言葉で伝える」ことを意識させた活動を続けたことで、相手に分かるように説明しようと、教え合いの中にも工夫がみられるようになった。これらの取組で生徒同士が互いの考えを認め合う場面が増え、学び合いの質が向上し、より多くの生徒の学力を伸ばすことにつながったと考えられる。

数学科 学びのMAP

単元の学習ポイント

《知識・技能》

・相似な図形の性質や平行線と線分の比などの関係を使って、長さを求めることができる。
・相似な図形の面積・相似な立体の表面積や体積を求めることができる。

《思考・判断・表現》

・三角形の相似条件を使って、証明できる。 ・相似の関係を使って、問題を解決できる。

節	教科書P	めあて	評価する力	理解度	予習	やった	習	やった
1. 図形と相似	122～127	相似の特徴を知る	知識・技能		86			87
	128～130	三角形の相似条件を見つかる&活用する	知識・技能		88			89
	131～133	三角形の相似条件を使った証明ができる①	思考・判断・表現		90			
	131～133	三角形の相似条件を使った証明ができる②	思考・判断・表現					91
2. 平行線と線分の比	134～137	平行線と線分の比(三角形)	知識・技能		94[1]			
	138～139	平行線と線分の比(平行線・角の二等分線)	知識・技能		93[2]			91
	139～142	線分の比と平行線	思考・判断・表現		94			95
	143	中点連結定理を使って長さを求められる	知識・技能		94[1]			97[1]
	144	中点連結定理を使って証明できる	思考・判断・表現		95[2]			97[2]
3. 相似な図形の計量	145～152	相似な図形の面積・表面積・体積を求める	知識・技能		98			99
4. 雑談の利用	153～157	相似の関係を問題解決に生かすことができる	思考・判断・表現		100			101

(2) 「豊かな心」と「勇気づけ教育の組織的展開」を目指して

①学校全体で非認知能力を高めるための組織的な取組

非認知能力等調査アプリ「見え～る」を活用し、学期ごとの生徒の非認知能力の変化を見取っている。アンケートの結果から見える学校の強みや学年ごとの特徴、学校全体の課題を見える化し学期ごとの取組を振り返り分析することで、授業改善や教育相談での個々の生徒に応じた適切な支援につなげている。また、結果を生徒に提示することで、生徒自身に自分の強みや自分に合った学び方など、自己を見つめるきっかけとなるよう活用している。これらの取組が、各学習方略、非認知能力（自己効力感）の値の伸びにつながっていると考えられる。

I 教育相談（非認知能力）アンケート 「見え～る」から抜粋		
自分への信頼		
自分への信頼	(1)	私は自分のことを大切に思っている。
自分への信頼	(2)	自分には良いところがある。
自分への信頼	(3)	私は努力すればしたいのことができると思う。
自分への信頼	(4)	自分の能力や状況を考えれば、自分はよくやっているほうだと思う。
自分への信頼	(5)	私はクラスの人や友だちから認められている。
自分への信頼	(6)	親や家族から大切にされていると思う。
動機性		
動機性	(1)	やらないうけないことはきちんとやる。
動機性	(2)	ルールや決まりを守って生活している。
動機性	(3)	身の回りのものの整理整頓ができる。
自制心		
自制心	(1)	イライラしているときや落ちこんでいるときに、自分で気持ちのコントロールができる。
自制心	(2)	乱暴な言葉を使ったり、行動したりしない。
自制心	(3)	人の話をきちんと聞くことができる。
向社会性		
向社会性	(1)	私は人とうまく協力できる方だと思う。
向社会性	(2)	誰に対しても親切に、人の気持ちをよく考える。
向社会性	(3)	自分から進んで家族、先生、友だちの手伝いをする。
やりぬく力		
やりぬく力	(1)	難しいことでも失敗を恐れず挑戦する。
やりぬく力	(2)	一度始めたことは何でも最後まで終わらせる。
やりぬく力	(3)	まじめにコツコツやるタイプだ。
学びの意識		
学びの意識	(1)	私は授業に意欲的に取り組んでいる。
学びの意識	(2)	授業で学んだことを振り返り、わかったことやわからなかったことをまとめている。
学びの意識	(3)	家でも勉強に取り組むようにしている。
学びの意識	(4)	計画を立てて勉強に取り組んでいる。

II 学年の非認知能力の分析

強み：自己肯定感が高く（90%前後）、人間関係も良好。学習集団として安心感が育ちつつある。

課題：「挑戦・粘り強さ」で差が出ており、困難に直面した時の粘りが弱め。

提案：文化祭などの行事で「やりきる経験」をさせる。

III 学校全体の非認知能力の分析

学校全体の強み

- 高い自己肯定感**
特に1・2年生で高く、生徒が安心して学校生活を送る基盤となっている。
- 良好な対人関係**
全学年で安定しており、安心感のある学習集団が育っています。

学校全体の課題と提案

全学年共通の課題：「挑戦・粘り強さ」
困難な状況に遭遇した際に、粘り強く取り組む力が弱い傾向が見られます。

提案：「挑戦したこと」を評価する文化の醸成
学校行事や日常の学習で、結果だけでなく挑戦する姿勢そのものを肯定し、自信に繋がります。

【参考】学年ごとの特徴

- 1年生**：主な強み：自己肯定感・対人関係
主な課題：挑戦・粘り強さ
- 2年生**：主な強み：自己肯定感・対人関係
主な課題：挑戦・学習意欲
- 3年生**：主な強み：安定した生活習慣・対人関係
主な課題：自己肯定感・挑戦心

IV 分析結果を活用した具体的な支援

- 学校として粘り強さが課題であることから、最後まで諦めずに課題に取り組むことができるよう、どの授業でも学びを自分で選択できる場面を授業で設定するなど、授業改善のきっかけに役立っている。
- 担任は、学期ごとの教育相談アンケートの結果をもとに、生徒の非認知能力の変容を見ながら教育相談を行っている。生徒自身が自覚していない自分の強みや、よくなったところを個人に返すことで、生徒のよさを認めるきっかけに活用している。

②自他ともに認めあえる学級集団、仲間づくり

全学級で学級力チャートを実施し、その結果をもとに各学期に学級会を行い、自分たちの学級をよくしていくために何を頑張るのか話し合ってきた。集団の一員としての自覚を深め、協力してよりよい学級を築こうとする自主的、実践的な態度を育てている。また、毎日の帰りの会での1分間スピーチ、毎週木曜日の帰りの会を10分間延長し、「一中タイム」として仲間づくりのためのグループワーク（アドジャン、絵しりとり、クイズなど）を行ってきた。これらの活動を継続してきたことが、相手の話を聴く態度、受け止め方のスキルの向上につながり、向社会性ややり抜く力、自己効力感などの非認知能力の値の伸びにつながっていると考えられる。

